

北海道旅行 3. 霧に抱かれて

釧路湿原から北上する道すがら、いくつか沼、湖が見えましたが、あまりにグングン走っているため、車は急には止まれない！ あっという間に弟子屈町に入りました。町は東に摩周湖、西に屈斜路湖を擁しています。



私たちの目的地は、世界第2の透明度を誇る、周囲を高さ600mの絶壁に囲まれた、神秘の湖といわれる摩周湖です。甘く、切なく、「霧に抱かれて静かに眠る」と歌われている摩周湖は、姿を見るのが難しいとの噂でしたが、晴れ男、晴れ女を自称している私たちの願いが叶い、摩周湖全体を展望台から眺めることができました。

真っ青な、静まりかえった世界が忽然と姿を現してくれました。摩周岳の切り立った荒々しい姿

と、湖の真ん中に断崖の小島がポツンと可愛らしい姿を見せて、それぞれのコントラストが鮮やかで、私を魅了しました。展望台の手すりから、身を乗り出して下をのぞき込みましたが、白樺、ダケカンバなどの原生林が見えるだけでした。あまりに清らかな青色、遥か下の湖面、水深が察せられるような深み、澄みきった汚れなさなど、すべてが摩周湖の神秘性なのでしょう。多くの観光客がため息をつきながら、また、見る事が出来た喜びに浸りながら、飽かずに眺めていました。

この駐車場で硫黄山に行くように勧められ、二つの湖の間にある硫黄山にも立ち寄りました。標高512mの活火山で、山腹からいくつもの噴煙を上げています。我らの地元、箱根の大涌谷を思い出して、どうなっているかしらと心配にもなりました。



コタンの祭壇(木の柵に幣)

屈斜路湖に回り、湖畔のコタン・アイヌ民族資料館へ行きました。四角と丸を重ねた積み木のようなこじんまりと整った建物が湖畔に立っていました。北海道にはアイヌが先住民族として住んでいて、屈斜路湖の周辺にもコタン(集落)を作って狩猟、漁猟、採集を中心に生活していました。彼らは信仰に厚く、自然界に多くの神々の存在を信じ、中でもコタンコロカムイ(シマフクロウ)を守り神としていたとのこと。

ここでDVDを見て、現在のアイヌの様子を知りました。アイヌとはアイヌ語で「人間」を意味する言葉で、もともとは「カムイ」(自然界の全てのものに心があるという精神に基づいて自然を指す呼称)に対する概念としての「人間」という意味だそうです。和人から蝦夷と呼ばれるのを嫌い、アイヌと自称し始めたとのこと。文字を持たないがゆえに、記録に残っているものはわずかです。アイヌにもユーカラ(叙事詩)があるそうですが、聞いたことがありません。現存する資料を大切に保存し、また、口誦による物語や、歌を伝えてほしいと思います。



子熊を育てる檻

ふと、ロマ族(ジプシー)の詩人パプーシャを思い出しました。彼女も森と泉のほとりで暮らし、孤独ではあっても、独自性を失わず、自然を愛し、自然と一体化する喜びに生きた女性です。

おお、なんてすばらしい、空を眺めるのは / いろんな青の色を心に刻むのは!

おお、なんて美しく森はざわめく / 森は私に歌を歌っている。

おお、なんて美しく川は流れる / 川が私の心を喜びで満たす。

なんてすばらしい、深い淵を覗き込み / すべてを話して聞かせるのは。

なぜなら誰も私を理解しないから / ただ森と川だけしか。(パプーシャの詩 一部)